

バウビオロジーの現代における可能性についての研究

—日本バウビオロジー研究会の刊行物を分析対象として—

A study of the contemporary potential of Baubiologie.

Capturing the contours of baubiologie from literature published in Japan and exploring its usefulness as a theory of architecture in contemporary Japan.

○西藤悠悟¹ 田所辰之助²

Yugo Saito¹ Shinnosuke Tadokoro²

During the 1960s and 1970s, rapid industrialization and urbanization in the highly industrialized post-World War II society led to environmental degradation that even affected the health of those who used architecture. As a result, two doctors in Germany systematized the concept of "baubiologie," and even today in Germany, baubiologists who have studied baubiologie have established a firm position as advisors in creating better spaces. In Japan, however, the field of Baubiologie has become unfamiliar and marginalized. The purpose of this project is to research and summarize the whole picture of baubiologie from books on baubiologie published in Japan, and to explore the role and potential of baubiologie in Japanese society.

1. はじめに

1-1. 環境への視点の歴史的変遷

環境に対する人々の関心は年々高まってきている。

その発端は1950年代末から1970年代にかけて起こった高度経済成長期にあり、急速な工業化と都市化が地球環境への悪影響を拡大させた。1970年代から地球の日など国際的な環境保護運動の波が広まった。1990年代には持続可能な開発の概念が注目を集め、21世紀になると気候変動の問題が急速に台頭する。現代では環境保護という課題は人類に共通の国際的なテーマであると認識され、多くの取り組みが行われている。

1-2. バウビオロジー研究の目的

1950年代末から70年代にかけて、第二次世界大戦後の高度工業化社会における急速な工業化と都市化は、建築を利用する人々の健康にまで影響を及ぼす環境悪化をもたらした。その結果、ドイツでは2人の医師が「バウビオロジー」という概念を体系化し、現在でもドイツではバウビオロジーを学んだバウビオローグがより良い空間づくりのアドバイザーとして確固たる地位を築いている。しかし日本では、バウビオロジーという分野は馴染みが薄く、一般的な関心の域外にある。本稿の目的は、日本で出版されたバウビオロジーに関する書籍から、バウビオロジーの全体像を調査・整理し、日本におけるバウビオロジーの役割と可能性を探ることにある。

2. バウビオロジーの概要

2-1. バウビオロジーの歴史

バウビオロジー発祥の地はボーデン湖と呼ばれるスイス、ドイツ、オーストリアの三つの国境にまたがる静かな湖と言われており、バウビオロジーという言葉自体はずいぶん古くから使われていたようだ。

再び歴史の中でバウビオロジーが脚光を浴びるのは、第2次世界大戦後、ドイツを含むヨーロッパではプレキャストコンクリートを使った住宅が急増し、都市は近代建築で満たされた。加えて、建材には「安く、早く」という合言葉の元、合成化学物質が大量に使用され、多くの原因特定が困難な被害者を産んだ。後に医者フリーベルト・バーム⁴博士と獣医のハインリヒ・ビーレンベルク⁵博士によって原因が「住まいの質」である事が導かれた。

1968年からアントン・シュナイダー⁶が建築の分野の中でバウビオロジーを体系化していく。「健康な住まいと住まいづくりのための作業共同体³」をに始まり、建築生物学研究所（IB）設立、1983年に建築生物学+エコロジー研究所ノイボイエレン IBN（2014年以降ローゼンハイム建築生物学+サステナビリティ研究所IBN）を設立。今ではバウビオロジーの考え方はネットを通じ世界中に発信されている。

2-2. バウビオロジーの概念

バウビオロジー (Baubiologie) とは Bau (建築) Bio (生命) Logos (論理) からなるドイツ語の造語で、日

1:日大理工・院(前)建築 2:日大理工・教員・建築 3:Arbeitsgruppe Gesundes Bauen + Wohnen

4:Hubert Palm 5:Hinrich Bielenberg 6:Anton Schneider

本語の直訳は「建築生物学」となる。住まいづくりを生物学的な「巣づくり」と解釈し、「最も身近な環境」、「第三の皮膚」として人間の健康と安全を守るものであり、同時に外界との接点でもあるとして、内側の住環境が健康で快適であることはもちろん、外側の環境に対しても害を及ぼしたり、調和を見出すようなことがあってはならないという考え方をする学問である。

アントン・シュナイダーはバウビオロジーを「住環境と人間との全体的諸関係についての学」^[1]として定義し、日本バウビオロジーの第1人者である石川恒夫氏は「バウビオロジーとは「住まいとは何か」という根本を問う学問」^[3]としている。

2-3. バウビオロジーに対する批判的な立場

バウビオロジーは現状を批判的に捉え改善策を模索している。現状を批判的評価する際、そこには当然議論や反論が生じる。『G A』誌の座談会では特に、統計的データの不備、因果関係の化学的証明の不足に関する指摘が集中していたようだ。バウビオロジーにより歪められた見方により、住宅や都市など人を取り巻く環境を構成する要素の一部を取り上げて、病気あるいは現代社会の欠陥の原因とされる。その際に、〈建築生物学者〉を自称する人達は、いわゆる〈新たな指針〉を提示するが、それは通常の間人によって認識されるものではなく、まして化学的に測定できるものでもない。そうすると、建築生物学者を自称する人の商売のために不安を煽ってるんじゃないかという疑いも生まれる。

2-4. ファッションとしての健康

環境や健康について一般の興味関心が向いてきた頃から、健康や自然、エコというワードは一種の免罪符として利用され、特に健康においては、その言葉自体に胡散臭さを纏うようになってきている。健康な建築をうたう内井昭蔵は健康を「「生きているもの」の価値基準である。人は病んだ時初めて健康の喜びや健康の価値を知るのである」^[5]と述べている。続けて健康とは本来、個人に属する価値概念であるとして、その基準も多様であり、絶対的なものはあり得ないとしている。ゆえに健康という言葉自体に胡散臭さやききな臭さを感じる人もいるのだろう。

2-5. 継続される日本バウビオロジー研究会の活動

日本バウビオロジー研究会は年に4回のセミナーと年に4回の会報誌『Baubiologie』の発行を行って

きている。その活動を2005年から18年間も続けている。セミナーでは日本はもちろん世界中からバウビオロゲ（建築生物学者）を招待し、作品を紹介していただき、そこから得られるデータの見解において、如何に健康であるか議論される。また、建築分野に留まらず医療関係者や環境学者など人を中心として広がる他分野の専門家を講師として招き人間を取り巻く環境における知見を養っている。

3. まとめ

3-1. データや経験の価値

データや経験則の重要性は科学的、歴史的に証明されている。建築作品についても、たとえば気候風土と建築設備の観点から居住環境の向上に取り組んだ聴竹居がそれを証明している。設計者の藤井厚二は、自邸を実験住宅として聴竹居以前に4回も建設と解体を繰り返している。その試みの中で、当時医学や衛生学の分野で議論されていた温湿度の課題について積極的、かつ実験的に設計に取り入れ、他にも設備的な観点から自然通風や、座位の異なる和洋の生活スタイルをいかに折衷するかといった社会的問題に対しても、科学的で客観的なデータと経験を経て聴竹居を完成させた。

3-2. バウビオロジー研究会の存在意義

2-4. で述べたような活動は、知識の広がりだけでなく議論の場を与え、住宅や建築の質の向上に繋がるだけでなく、建築界に新たなテーマを提示する可能性を有している。1970年代以降、建築家の興味が拡散していった現代において、情報の交換や議論の場として、人間という生物のもと多く存在する問題を円環上に繋ぐBaubiologieのもとに建築家達が集まり議論できることは大変有意義であると言えるのではないだろうか。

4. 参考文献

- [1] アントン・シュナイダー（石川恒夫訳）『バウビオロジーという思想』建築資料研究社 2003. 11
- [2] 石川恒夫「バウビオロジーとエコロジー ドイツでの試み」『新建築』10月号 p172~p175, 1999
- [3] 石川恒夫「バウビオロジー 人間と住まいの幸せな関係を目指して」『神籬』56号, 西垣林業 2017. 10.
- [4] 岩村和夫『環境建築論』（SD選書）鹿島出版会, 1990
- [5] 内井昭蔵『健康な建築-イマジネイティブな生活空間を求めて』彰国社, 1985, 10
- [6] 佐々木徳貢『バウビオロジー 新しいエコロジー建築の流れ』学芸出版社, 1998. 4
- [7] 日本バウビオロジー研究会『Baubiologie』53~65号
- [8] ホルガー・ケーニッヒ（石川恒夫訳）『健康な住まいへの道』建築資料研究社, 2000, 3
- [9] 岩村和夫『環境建築論』（SD選書）鹿島出版会, 1990